九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ヴィットリアの曖昧性

蛯原，啓

https://doi.org/10.15017/2332732

出版情報：文學研究. 72, pp.15-33, 1975-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

ヴィットリアの曖昧性

蛯　原　　啓

ウェブスター（John Webster）の『白魔』（*The White Devil*, 1612）の世界は，確かに多くの批評家たちが指摘しているように，道徳的に混沌の世界である。主要人物の殆どが悪人であり，わずかに存在する善人たちは，圧倒的に強い悪の力に全く無力である。従ってこの作品の中心テーマは，悪と悪の争いということになる。実はここに難点がある。

通常＜善＞と＜悪＞の対立という形でプロットが展開する場合，作者は一応我々に共感すべき人物を用意してくれる。つまり，我々に判断のための基準を用意してくれるのである。いかに悪魔の如き人物が現われても，我々には一種の安心感がある。

ところが『白魔』の場合，作者は悪と悪の抗争の中に我々をほうり込み，しかも悪に魅力を与えることによって，この作品の持つモラル・ヴィジョンを故意に曖昧なものにしている。もちろん，この作品にも，全体としてみた場合，作者のモラルは存在する。フラミネオ，ロドヴィーコ，それにヴィットリアも最後には反省しているし，ジョヴァンニによって秩序の回復が象徴されている。しかし，作者の最大の関心は，腐敗せる宮廷人の言動を描き，彼らの精神的頽廃ぶりを俎上にのぼすことにあったと思われる。ただ作者は，悪を単なる悪として描くことに満足せず，罪人でありながら，時としては称賛せざるをえないような人物を創造した。ヴィットリア・コロンボーナがそれである。しかしながら，作者の描くヴィットリア像にはあまりにも曖昧な点が多い。本稿では，この女性の提示する解釈の困難性について検討してみたい。

I

開幕と同時に，いきなり「追放だと！」と叫んで一幕一場を支配するロドヴィーコは，伯爵とはいえ，いわば単純な悪漢の曲型である。殺人を含む数々の罪を犯していながら，自らの非を認めるどころか，責任をすべて自分の外に押付けようとする。事実この劇は，ロドヴィーコに限らず，自らが犯した罪の責任を他人に転嫁しようとする連中で満ちあふれている[1]。ロドヴィーコにしてみれば，自分のような小物は罰せられ，大物は結局罰せられないという社会的不公平に我慢出来ないのである。彼の不平忿懣は，いつの時代にも通じる社会的不公平に対する鋭い批判であるが，自分が犯した殺人を単に「蚤が喰った程度のもの」としか思っていない点で自らの非人間性をさらけ出している。友人ですら彼の追放刑が正当であることを認めているのである。

このロドヴィーコが忿懣をぶちまけ，槍玉にあげているのが，ブラチアーノ公爵であり，その公爵が言寄っているヴィットリア・コロンボーナである。奇妙なことに，ロドヴィーコは，事件が発生しないうちからこの二人の復讐を誓っているのである。

このような文脈の中で，我々は初めてヴィットリアの名前を聞く。ブラチアーノ公に秘かに言寄られているヴィットリアである。

一幕二場になると，二人の間を取持とうと懸命になっている男が，ヴィットリアの兄フラミオネであることが判明する。求愛に殆ど絶望的になっているブラチアーノ公を激励し，妹を彼の情婦にしようとする。それもただ金と昇進を願ってのことである。フラミネオにとって，妹はその手段にすぎない。

ブラチアーノとヴィットリアの関係を考える際に特に重要なことは，ヴィットリアの態度である。ブラチアーノが彼女を愛していることはまず疑う余地がない。しかし，彼女の方がブラチアーノを愛しているかどうかは，極めて曖昧にしか描かれていない。確かに彼を受入れるようになるが，彼

女自身の気持は，殆ど明らかにされないままである。夫のカミロが性的不能者であり，フラミネオとの会話の中で明らかなように，愚かな男であってみれば，美しく，しかも生命力に富むヴィットリアにとって，既に夫が色褪せた存在であることは容易に想像出来る。このような夫をヴィットリアに与えることによって，作者は，結婚生活という面で，彼女に我々の同情を向けようとしているのではないだろうか。そうでもなければ，殊更にカミロの愚鈍さを暴路する必要はないからである。つまり，正式に結婚している夫から離れようとしているヴィットリアに，作者はある程度の正当性を与えようとしているのではないだろうか。しかも，ブラチアーノからの積極的な接近に対しては，極めて曖昧にしか反応させないことによって，当然起るべき非難の声を和らげようとしているのであろう。ブラチアーノの熱心な求愛に対して，ヴィットリアは，ただ "Sir in the way of pity / I wish you heart-whole." (I. ii. 208-9)[2] と答えるのみである。そして，ザンケの言葉（"See now they close." I. ii. 214）からわかるように，恐らく二人は抱擁する。フラミネオにとって，これは "Most happy union." (I. ii. 215) ということになる。

この直後に述べられるヴィットリアの夢は，彼女に悪名をもたらす最大の要因であるが，その意味は必ずしも明確ではない。ただ，劇中屢々解説者の役割を果しているフラミネオが，傍白で

Excellent devil.
She hath taught him in a dream
To make away his duchess and her husband. (I. ii. 256-8)

と解釈しているので，我々もそれをヴィトリアがブラチアーノに対して，殺人を教唆したものと解釈するのである。この場において，ブラチアーノが，この夢の真意をどれだけ理解したかはわからないが，とにかく彼はフラミネオと共謀して，カミロと公爵夫人イザベラを殺害させることになる。

娘のヴィットリアが，息子のフラミネオの取持ちで，秘かにブラチアーノと通じているのを目撃したコーネリアは，母親として悲嘆にくれ，三人を諌めにかかるが，フラミネオやブラチアーノはまるで聞く耳を持たない。ただヴィットリアだけは，

I do protest if any chaste denial,
If anything but blood could have allayed
His long suit to me,—— (I. ii. 291-3)

と言って——途中で母親に遮られるけれども——その事実を認めながらも，自らの責任は回避しようとする。即ち，いやいやながら受入れざるをえなかったのだ，と主張し，むしろブラチアーノへの愛を否定するのである。

確かにこの段階で，ヴィットリアの口からブラチアーノへの愛情を示すような言葉は，一切発せられていない。にもかかわらず，カミロ，イザベラ殺害を教唆したのはなぜか。ブラチアーノと結婚して，文字通り公爵夫人の座におさまろうという野望があるからではないか。彼女には，そう解釈されても仕方がないところがある。しかし，彼女は母の非難に動かされて，良心の咎めを感じ，"O me accurst." (I. ii. 301) と言って退場する。以後，裁判の場 (III. ii) になるまで，彼女は姿を現わさない。

II

裁判の場におけるヴィットリアの言動は，批評家が称賛しているように，極めて印象的である。チャールズ・ラムの "an innocence-resembling boldness"[3] という言葉は，見事なヴィットリア評となっているが，審理が進行するにつれて，ヴィットリアに対する我々の気持は甚だアンビヴァレントなものになってゆく。

審理は，モンティセルソ枢機卿とフローレンス公爵フランシスコが検察

官兼裁判官という一方的なものであり，被告はカミロ殺しの容疑で逮捕されたフラミネオ，マーセロ，ヴィットリアの三兄弟，それに各国の大使たちが傍聴していて，一種の陪審員の役を果している。被告のうちフラミネオとマーセロは殆ど問題にならず，議論は専らヴィットリアに集中する．

もともとモンティセルソはカミロのおじであり，フランシスコはイザベラの兄であってみれば，この二人がブラチアーノとヴィットリアに敵意を抱くのは当然である。彼らは，実は，イザベラとカミロが殺害されないうちから，ブラチアーノとヴィットリアを陥れようと企んでいたのである (II. i. 375ff)。こういうマキアベリアンが，公明正大であるべき裁判官の役をするのであるから，はじめから正義など期待すべくもない。しかも彼らは，ヴィットリアの罪を立証することが不可能だということをはじめから認めているのである。

... we have nought but circumstances
To charge her with, about her husband's death,——
Their [i.e. the ambassadors'] approbation therefore to the proofs
Of her black lust, shall make her infamous
To all our neighbouring kingdoms,—— (III. i. 4-7)

審理は，法律官によるラテン語の訴状の朗読から始まろうとするが，ヴィットリアはこれに反対し，公判がすべて誰にでもわかる英語で行われることを強く要求する。

...amongst this auditory
Which come to hear my cause, the half or more
May be ignorant in't....
I will not have my accusation clouded
In a strange tongue: all this assembly

Shall hear what you can charge me with. (III. ii. 15-7 ; 18-20)

これを聞いたモンティセルソの "O for God sake: gentlewoman, your credit / Shall be more famous by it." (III. ii. 22-3) という言葉は，恰もヴィットリアに対する思い遣りを示しているように聞こえるが，この裁判の目的がもともと「諸国に彼女の悪名を響きわたらせる」ことだと自ら既に言明しているのであるから，偽善も甚しいといわねばならない。

とにかく，ヴィットリアの要求は認められ，母国語で審理が進められるが，法律官の使う英語たるや，大袈裟で，難解な，しかも間違った単語や飾りだてばかりで，まるで何を言っているのかわからない。これに対するヴィットリアの皮肉は痛烈である。

Surely my lords this lawyer here hath swallowed
Some pothecary's bills, or proclamations.
And now the hard and undigestible words
Come up like stones we use give hawks for physic.
Why this is Welsh to Latin. (III. ii. 35-9)

これにはさすがのフランシスコも閉口して，この法律官を退場させる。ここでヴィットリアは，検察側に対して，明らかに一本とった形である。なぜならば，今日と同じように，当時の観客もラテン語を知らない連中が大部分を占めていたであろうし，そういう人たちは，ヴィットリアの主張に共感を示したに違いないからである[4]。実質的な審理にはいらないうちに，ヴィットリアは，まず観客の心を自分の方に近づけることに成功するのである。

モンティセルソが新たに攻撃をかけると，ヴィットリアは，そのひとつひとつに反駁を加え，決して引けを取らない。モンティセルソナの描く見事なヴィッリア像

You see my lords what goodly fruit she seems,
Yet like those apples travellers report
To grow where Sodom and Gomorrah stood,
I will but touch her and you straight shall see
She'll fall to soot and ashes. (III. ii. 63-7)

も，彼女には何の手答えもない。更に彼が，

Were there a second paradise to lose
This devil would betray it. (III. ii. 69-70)

と言えば，彼女は

O poor charity!
Thou art seldom found in scarlet. (III. ii. 70-1)

と皮肉に満ちた言葉でやり返す。更に枢機卿が長々と「娼婦」論を展開すれば，"This character scapes me." (III. ii. 101) と答えて，まるで取合わない。この様子を聞いていた二人の大使が，"She hath lived ill." "True, but the Cardinal's too bitter." (III. ii. 106-7) と感想を述べる。これはそのまま，観客の気持を代表しているものといえよう。イギリス大使が，再び，"She hath a brave spirit. (III. ii. 140) と評するのも，ヴィットリアのひるまぬ挑戦に対する称賛である。

ヴィットリアの殺人容疑は，立証不能ということで，審理は彼女の不義の問題に移る。彼女は，ここでも，ブラチアーノから誘惑された事実は認めるが，自分は「冷たい返事」しか与えていないと主張する。確かに，彼女がブラチアーノをどれだけ愛しているかは，故意に伏せられていて，よくわからないのであるが，彼女が公爵を受入れることだけは紛れも無い事実である。にもかかわらず，彼女が

Condeme you me for that the duke did love me?
So may you blame fair and crystal river
For that some melancholic distracted man
Hath drown'd himself in't....
Sum up faults I pray, and you shall find
That beauty aud gay clothes, a merry heart,
And a good stomach to a feast, are all,
All the poor crimes that you can charge me with. (III. ii. 203-10)

と自らを美化して挑戦する時，我々は彼女の厚かましさに驚かざるをえない。不義を犯し，殺人を教唆したにもかかわらず，それに対する反省はまるでなく，ブラチアーノを「憂鬱病にかかった頭のおかしい男」に，自らを「美しく，水晶のような川」に準える彼女の厚顔無恥には，我々もついてゆけない。こうなると，むしろ，枢機卿の "If the devil / Did ever take good shape behold his picture." (III. ii. 216-7) の方に共感を覚えるのである。

しかし，ヴィットリアが枢機卿に対して，検察官が裁判官を兼ねる不当性を指摘する時，彼女の主張が正しいことは，誰の目にも明らかである。従って，更生院行きの判決が下され，彼女が今にも連行されようとする時 "A rape, a rape ! ...you have ravish'd justice, / Forc'd her to your pleasure." (III. ii. 273-5) という彼女の叫びは，痛烈で機知に富み，我々を驚嘆させるものである。自らの罪や責任は一切認めようとはせず，自らの行為の正しさに確信を持っているかのように振舞う。そのくせ，他人の弱点は痛烈に暴き，遠慮なく揶揄して憚らない。自らを弁護するというよりは，むしろ機会あるごとに相手に挑戦し，相手をたたきのめすことに喜びを感じているようである [5]。

しかし，如何に勇敢に振舞おうとも，彼女が殺人を教唆し，不義を犯した罪人であることに変りはない。如何に <white> であることを主張し

たところで，<devil> であることに変りはない．彼女の<見せかけ>と<現実>とには，大きな隔たりがある。それがわかっていながら，裁判の場で，彼女が我々の同情を引くのはなぜか。まず第一に，彼女が，事実上たったひとりで，権力を欲しいままにしているマキアベリアンと相対峙し，いわば一種の <underdog>[6] となっている からである。換言すれば，<善>が<悪>を裁いているのではなく，<権力のある悪>が<力のない悪>を裁いているからである。第二に，ヴィットリアは，そういう不利な状況にありながら，検察側の追及に対して少しもひるまず，機知に富んだ反駁で以て彼らを圧倒した。あまりにも見事な反論や批判であるために，一時的にせよ，そこには善悪を越えた力が観客に作用することになる。それが彼女の最大の強みである。しかし，これは決して彼女の罪を張消しにするというの ではない。ヴィットリアは <悪> であるけ れども，その<悪> を一瞬忘れさせる何ものかがある，といっているのである。「怪しからん」と思いつつも，感心せざるをえないようなもの，つまり我々にアンビヴァレントな気持を強要するようなものを彼女は持っている。それが最大限に発揮されるのが裁判の場である。その点，彼女は見事な役者である。

ヴィットリアに較べると，彼女の “champion” であるべきブラチアーノはみじめなものである。枢機卿の非難をまともに受けて反論することも出来ず，ただ威勢よく脅迫めいたことを大声で叫ぶだけである。彼の “Cowardly dogs bark loudest.” (III. ii. 164) という言葉は，そのまま自己描写になっていて皮肉である[7]。嘘八百の偽善で自己弁護に終始し，あげくのはては啖呵を切って，逆上し，ついにヴィットリアをひとり残して退場してしまう。彼女への愛情はどこへ行ったのかと疑いたくなる行動である。いわば，ヴィットリアが完勝を得たこの場面で，その同じ枢機卿によって，ブラチアーノは完敗を喫するのである。

III

裁判終了後，即ち三幕二場の終りで，フランシスコは妹イザベラの死を知る。ここからブラチアーノ復讐という大きなテーマが動きだす。フランシスコの遣り口は，陰惨であり，自分は決して表面に出ない。まさしくマキアベリアンである。

まずブラチアーノを陥れるために，更生院に収容されているヴィットリアに偽りの恋文を書き，ブラチアーノにそれが知られるような方法で，召使に手紙を持って行かせる。フランシスコの予想は見事に的中し，ブラチアーノはこの恋文を見て逆上する。ヴィットリアにしてみれば，全く謂れの無い非難であり，ブラチアーノに身の潔白を主張するが，一旦逆上した公爵は，全く聞く耳を持たない。そうなると今度は，ヴィットリアの方も負けずに反論するしかない。そこで両者は激しく口論することになる。議論となれば，裁判の場で明らかなように，ブラチアーノなどヴィットリアの敵ではない。ただしここでも，ブラチアーノと違って，ヴィットリアの言動には明快な解釈を許さないものがある。

ヴィットリアの恋文は誰かの陰謀だ，と主張すると，ブラチアーノは彼女を "the devil in crystal" (IV. ii. 92) とののしり，彼女のために身の破滅を招いている，いわば自分は犠牲者だ，と叫ぶ。むろん，これはブラチアーノの責任回避であって，テクストにみる限り，彼の方が彼女に言寄ったことは否めない事実である。しかし，ブラチアーノの罵倒を聞いて，ヴィットリアが泣くというのはどういうことか。愛する男が自分を信じてくれないで泣く悔し涙か。つまり，ほんとうに悲しんで泣いているのか。それとも，ブラチアーノが情にもろいことを知って，ひと芝居うっているのか。少くともブラチアーノは，これをほんとうの涙とは思っていない (IV. ii. 95)。

しかし，ブラチアーノがイザベラの良さに言及し，ヴィットリアを求めたことを後悔するような口ぶりになると，彼女の方でも黙ってはいない。

そこでお互に責任の擦り合いを始める。ここでもヴィットリアの弁舌は，相手を圧倒してしまう。

What have I gain'd by thee but infamy?
Thou hast stain'd the spotless honour of my house,
And frighted thence noble society:...
What do you call this house?
Is this your palace? did not the judge style it
A house of penitent whores? who sent me to it?
Who hath the honour to advance Vittoria
To this incontinent college? is't not you?
Is't not your high preferment? Go, go brag
How many ladies you have undone, like me.
Fare you well sir; let me hear no more of you.
I had a limb corrupted to an ulcer,
But I have cut it off: and now I'll go
Weeping to heaven on crutches. For your gifts,
I will return them all; and I do wish
That I could make you full executor
To all my sins,——O that I could toss myself
Into a grave as quickly: for all thou art worth
I'll not shed one tear more; ——I'll burst first.

(IV. ii. 107-9; 113-28)

こう言い終えると，彼女はベッドの上に身を投げて，泣き始める。

この動作は，ほんとうにヴィットリアの感情から自然発生的に出てきたものか，それとも芝居か。確かにヴィットリアは，ブラチアーノの卑怯な言逃れに憤慨し，プライドを傷つけられ，自らもその忿懣をここでぶちま

けるのであるが，そこに同時に，彼女の演技が感じられないだろうか。ブラチアーノが法螺吹きで，感情的であり，容易に罠にかかる人物であることは，フランシスコですら見抜いている。まして，知的なヴィットリアに，それが見抜けぬはずがない。しかも，周囲に誰一人として頼るべきものはなく，むしろ敵に囲まれたような状況であってみれば，彼女にとってブラチアーノは，やはり唯一人のパトロンであろう。とすれば，もはやこの段階で，彼を簡単に手離すわけにはいかない。ブラチアーノのような男に対しては，イザベラのように，なまじやさしい言葉で嘆願するよりも，むしろ歯に衣着せぬやり方が怒りをぶちまけ，相手を突っ撥ねた方がよい。そうすればかえって相手を引寄せる結果になるのである。ヴィットリアが自らの<絶望感>をさらけ出すことによって，それがかえってブラチアーノの心を奥底から激しくゆさぶり，彼女の存在の重さを改めて身にしみさせるのである。

I have drunk Lethe. Vittoria!
My dearest happiness! Vittoria! (IV. ii. 129-30)

というブラチアーノの反応は，ヴィットリアの完勝を意味する。彼女を必要以上に打算的な女性にするつもりはないが，無類の役者であるという印象は拭い難い[8]。

これで形勢は全く逆転し，今度はブラチアーノがヴィットリアに改めて愛の告白を行い，和解を嘆願することになる。むろんヴィットリアは，簡単にこれを受入れることはしない。適当に焦らしておいて，結局，フラミネオの勧めに従ってブラチアーノが彼女に口づけすると，彼女はそれを黙って受入れている。少くとも何らの抵抗を示していない。この間，ヴィットリアの口からブラチアーノに対して，愛を表現するような言葉は一切発せられていない。公爵がヴィットリアと正式に結婚して，彼女は公爵夫人にしたいと伝えても (IV. ii. 220-21)，彼女は何とも返事をしていない。

ヴィットリアの真意は，依然として摑み難い。

IV

ブラチアーノの約束通り，二人は結婚式をあげるが，その日のうちに，ブラチアーノはフランシスコの殺し屋ロドヴィーコによって毒殺されることになる。毒がまわり，ブラチアーノが苦しみ始めた時，ヴィットリアが最初に発する言葉は "O my loved lord, —— poisoned?" (V. iii. 7)である。ブラチアーノが

Where's this good woman ? had I infinite worlds
They were too little for thee. Must I leave thee ? (V. iii. 17–8)

と言ってヴィットリアを求めると，彼女は公爵に口づけしようとするのであろう。彼は "Do not kiss me, for I shall poison thee." (V. iii. 26) と言っこ彼女を離す。以下ヴィットリアがブラチアーノの苦しみと狂乱状態を見守りながら発する言葉は，極めて単純な叫びの連続である。

"I am lost for ever." (V. iii. 35)
"O my good lord !" (V. iii. 82)
"O my lord !" (V. iii. 90)
"My lord, here's nothing." (V. iii. 105)
"O ! lie still, my lord—" (V. iii. 108)

ブラチアーノが十字架を凝視していることを知ると，彼女は必死になって，

O hold it constant.
It settles his wild spirits ; and so his eyes

Melt into tears. (V. iii. 132-4)

と言って，少しでも彼の気持を和らげようと懸命になる。彼が最期に十字架を見つめること自体象徴的である。

やがて彼は，カプチン派の僧侶に変装したロドヴィーコとガースパロによって絞殺されるが，彼の最期の言葉は "Vittoria? Vittoria!" (V. iii. 167-8) である。これだけでは，その意味するものがよくわからないけれども，ヴィットリアに対する心からの愛の表現をしているように思われる。妻を毒殺させ，カミロを殺させ，何ら良心の咎めも感じない悪人ではあるが，彼がヴィットリアを心から愛していたことだけは確かである。その点，復讐者が卑劣な手段を使うだけに[9] 我々の憐みを誘うものがある。

舞台に姿を現わし，公爵の死を知ったヴィットリアは，"O me! this place is hell." (V. iii. 179) と叫んで，また直ちに退場する。これを聞いて，フランシスコ（変装中）は，"How heavily she takes it." (V. iii. 179) と感想を述べている。次に続くフラミネオの言葉からわかるように，ヴィットリアは泣きながら退場したのである。ここには彼女の芝居は全然感じられないし，やはりブラチアーノの死を悼んで悲しみに陥ったものと解釈せざるをえない。この場面に関する限り，ヴィットリアは公爵の不運を心から気遣い，自らは何も出来ないで，途方に暮れているやさしい女性である。裁判の場，口論の場におけるヴィットリアとは，随分異なった印象を受けざるをえない。即ち，場面によって，彼女が我々に与える印象が，甚だ違うのである。

V

次にヴィットリアが姿を現わすのは，この劇の最後の場面 (V. vi) であり，その時彼女は本（恐らく祈禱書）を手にして，祈っている。罪を悔いての祈りか。それとも，ブラチアーノの冥福を祈っているのか。恐らく後

者と解釈するのが,筋の展開からいって自然であろう。とすれば,彼女はやはり彼を真に愛していたのだろうか。ところが,この場面を通じて,彼女はブラチアーノに殆ど言及していない。まるで何もなかったかのようである。

ブラチアーノが死に，その息子ジョヴァンニから宮廷を追われてしまうと，いわばブラチアーノの寄生虫的存在であったフラミネオには頼る人がなくなってしまう。そこでジョヴァンニが成人するまで，財産の管理を任せられている妹に目をつけ，公爵に代って彼女に「報酬」を求める。妹がまるで取り合わないことがわかると，彼は，公爵の命により，二人は死なねばならぬという。もとよりヴィットリアには死ぬ気など毛頭ない。召使ザンケの機転で，まずフラミネオを先に死なせる工夫をする。そこで二人は芝居を始める。

Vittoria. O but frailty!
Yet I am now resolv'd,——farewell affiction;
Behold Bracciano, I that while you liv'd
Did make a flaming altar of my heart
To sacrifice unto you; now am ready
To sacrifice heart and all. Farewell Zanche.
Zanche. How madam! Do you think that I'll outlive you?
Especially when my best self Flamineo
Goes the same voyage. (V. vi. 81-9)

ここでヴィットリアは，ブラチアーノへの愛情に言及しているけれども，果して彼女が心からそう思っているのか。大変美しい愛の表現ではあるが，これはあくまで兄を欺くためのものであって，額面通りに受取るわけにはいかない。

フラミネオも負けてはいない。彼自身も観客の意表を突くような芝居を始める。致命傷を負ったふりをして，二人の反応を見るのである。二人の

女性を信じていない証拠である。つまり，フラミネオは，妹やその召使いがどういう女性であるかをよく知っているからこそ，このように用心深い方法をとるのである。ピストル発砲後，フラミネオが瀕死の状態にあると思っている二人の女性は，彼に対してさんざん悪態をつく。そこへフラミネオがひょっこり立上るのであるから，フォールスタッフに劣らず滑稽である。

しかし，今度は，フランシスコに雇われた殺し屋たちが現われて，三人共一緒に殺されることになる。ヴィットリアは，まず "O your gentle pity !" (V. vi. 183) と言って命乞いをするが，それが受入れられないと悟ると，俄然挑戦的な態度にでる。むろん死を覚悟してのことである。ロドヴィーコに対して言う "Fall down upon thy knees and ask forgiveness" (V. vi. 213) は，まことに堂々たるものであり，ザンケが先に殺されかけると，

You shall not kill her first. Behold my breast,——
I will be waited on in death ; my servant
Shall never go before me. (V. vi. 216-8)

と主張して，ガースパロを感心させ，クレオパトラをも凌がんばかりである.

I shall welcome death
As princes do some great ambassadors ;
I' ll meet thy weapon half way....
I will not in my death shed one base tear,
Or if look pale, for want of blood, not fear. (V. vi. 219-21 ; 25-6)

我々は，再び，裁判の場におけるあの大胆不敵なヴィットリアを思い起こ

さずにはおれない。

そういうヴィットリアも，死んでいくわが身を顧みてか，自らの罪と責任を認めるに至る。

O my greatest sin lay in my blood.
Now my blood pays for't. (V. vi. 241-2)

初めの 'blood' を 'passion' と解すれば，ブラチアーノに対する愛情を指すことになる。それが自分の破滅をもたらしたというのである。自らの行為に対する反省らしきものが，ここに至って初めて現われる。たった二行ではあるが，明らかに一つのモラルを示している。

フラミネオが「霧の中」にある如く，ヴィットリアもまた罪を犯した魂がどこへ行くのかわからない。

My soul, like to a ship in a black storm,
Is driven I know not whither (V. vi. 248-9)

しかし，彼女の最期の言葉には，自らの罪というよりは，むしろ宮廷の腐敗に自分の破滅の原因があるようなニューアンスがある。

O happy they that never saw the court,
Nor ever knew great man but by report. (V. vi. 216-2)

ヴィットリアにとって，宮廷とは，結局，ブラチアーノとの交わりを示すのであるから，彼女は彼と出会ったことを悔んで死んでゆくわけである。

VI

以上ヴィットリアが登場するすべてのシーンについて，彼女の足取りを辿ってきたわけだが，我々が彼女から受ける印象は，決して一貫したものではない。彼女の性格描写そのものがかなり曖昧であり，従って我々の反応も混乱したものにならざるをえない。しかし，その曖昧性が，かえってこの女性の魅力を増していることも否定出来ない[10]。

もし作者が，ヴィットリアの性格をもう少し明確なものにしようと思えば，いくらでも出来たはずである。独自，傍白などの当時のコンヴェンションは，この劇の中でも屢々使われており，そういう手段を使ってでも，彼女の曖昧性を避けることは出来たであろう。しかし，作者はそうしなかった。彼女が，ほんとうに何を考えているのか殆どわからないままで，この劇は終ってしまう。我々は，いつも数少い彼女の科白から色々と推量せざるをえないのである[11]。従って，確信を以て，彼女の性格を論ずることは殆ど不可能に近い。

ヴィットリアの曖昧性の主な理由は，J.R. ブラウンが指摘しているように，彼女が断片的にしか示されていないことである[12]。彼女が登場するシーンによって，全く異なった印象を我々に与え，そこに一貫した性格描写がなされていないのである。たとえば，裁判の場のヴィットリアから口論の場のヴィットリアへの移行は，当然予想出来るものであるが，口論の場からブラチアーノ毒殺の場を経て最後の場面への移行は，ヴィットリアに関して大変ちぐはぐな感じを我々に与えることは，既に指摘した通りである。

仮面の背後にあるヴィットリア・コロンボーナとは一体何物か。殺人を教唆し，夫の死に対しても平然としていて，“O he's a happy husband / Now he owes nature nothing. (III. ii. 110-1) とまるで無関心な反応しか示さない。裁判の場においては，全く潔白であるかのように振舞い，大胆不敵にも，機会あるごとに検察側を攻撃する。彼女のヴァイタリティ

に圧倒されて，我々の反応も極めてアンビヴァレントなものにならざるをえない。口論の場においても，既にみたように，ヴィットリアの真の姿はわからない。ブラチアーノの彼女に対する愛は確証出来ても，ヴィットリアが公爵を愛していたかどうかは最後までわからない。要するに，ヴィットリアについては，曖昧な点があまりにも多すぎるといわねばならない。ヴィットリア・コロンボーナとは，仮面をかぶった謎の女性である。

注

1. S. W. Sullivan, "The Tendency to Rationalize in *The White Devil* and *The Duchess of Malfi*," *The Yearbook of English Studies*, ed. T. J. B. Spencer, Vol. 4(1974), 77—84.
2. 以下引用は J. R. Brown(ed.), *The White Devil* (The Revels Plays) (London: Methuen, 1960) による。
3. G. K. Hunter and S. K. Hunter (eds.), *John Webster* (Penguin Critical Anthologies) (Penguin Books, 1969), p. 56.
4. D. C. Gunby, *Webster: The White Devil* (London: E. Arnold, 1971), p. 32.
5. W. W. Greg, "Webster's 'White Devil': An Essay in Formal Criticism," in *The Collected Papers of Sir Walter Greg*, ed. J. C. Maxwell (Oxford, 1966), p. 14.
6. P. B. Murray, *A Study of John Webster* (The Hague: Mouton, 1969), p. 90.
7. H. B. Franklin, "The Trial Scene of Webster's *The White Devil* Examined in Terms of Renaissance Rhetoric," *Studies in English Literature*, I(1961), 46.
8. Greg, p. 15; Murray, p. 80.
9. 復讐者たちによる宗教の悪用という卑劣な手段を一応別にすれば，ブラチアーノがイザベラを毒殺させたことを考えると，彼はまさしく同じ方法で復讐されるわけだから因果応報というべきかもしれない。
10. R. W. Dent, "The White Devil, or Vittoria Corombona ?" *Renaissance Drama*, IX(1966), 196.
11. Dent, p. 195. なお，私の計算によれば，この作品の全行数 3020 に対して，ヴィットリアの科白はその約10%にすぎない．因に，フラミネオが約30%で断然多く，次いでフランシスコの約14%，ブラチアーノの約12%，その次がヴィットリアである。
12. J. R. Brown(ed.), *The White Devil*, pp. xlviii—xlix.